

推しに抱かれて、壊される

——マネージャーは嘘つき処女

夜果堂書房／高瀬ザクロ

第一話 ファンじゃないです——それは嘘と忠義のはざまに

「本日からマネージャーを務めさせていただきます白石サナです。
よろしく願いいたします」

震えを押し殺しながら差し出した名刺。その視線の先にいたのは、
サナが憧れ続けてきたバンド、ユア・ミックスのギターボーカル、
大崎一郎。

（本物だ……こんな近くに……）

推しとの大接近。

ファンなら願ってもいない状況なのに、サナの心臓は不安で押しつぶされそうだった。

なぜこんなことになったのか。

大崎一郎の所属する音楽事務所が、海外との音楽版權事業を発足させるため、手っ取り早くサナの勤めていた小さな貿易会社を買収したのだ。

英語の話せるサナは海外事業部へ。しかも信じられないことに大崎一郎の個人マネージャーも兼任しろとの辞令だった。

断ろうと思った。本当は、絶対に断らないとだめだった。

だってサナは、中学生のときから一郎の大ファンなのだから。

中学時代、友達に気持ちをうまく伝えられず喧嘩した帰り道。

涙をこらえて入ったコンビニで、雑誌の表紙にいた彼に目を奪われた。嘘を見抜くような強い瞳。すっとした鼻筋。意志の強さを感じさせる固く結ばれた口元。目元に厚くかかる黒い前髪。筋張った、でも細くて繊細な指。

「おおさき、いちろう……?」

スマホですぐに検索して、動画を再生した。

言葉にできない気持ち 夜を超える だけどそれが僕らの未来

自分のことを歌ってくれていると思った。

なぜか、もう一人じゃないって思えた。

あの時からずっと、彼の歌声はサナにとって救いだった。受験勉強も学校での嫌な出来事も、全部一郎の歌声で乗り越えてきた。

推しは神様。軽々しく近づいてはいけない。遠くから崇めるもの。

それなのに直属の上司である宮内先輩から懇願されてしまった。

「お願いよ白石。あなたしか適任がないのよ。白石あんまり音楽興味ないでしょ？ね？頼むよ、英語できてまじめな子って白石しかないなくてさ、ほかの子みんなミーハー心丸出しで困ってるのよ…」

（私も本当はミーハー心丸出しのガチ恋勢なんです…）

言えなかった。

宮内先輩には新人の頃から散々お世話になってきた。

取引先とのめめ事も、社内でのトラブルも。いつかは取引先からの帰り道に変な男に付きまとわれて困っていた時、ケリを食らわせて

撃退してくれたこともあった。

憧れていた。宮内先輩の後姿を追って今まで頑張ってきたと言っても過言ではない。

サナは眉を下げてうなずくしかなかった。

——これは、恩義だ。仕事だ。決して、一郎さんに近づきたかったわけじゃない。先輩に恩返しするだけ——

「……お前、ファンじゃないよな？」

初対面のその一言に、心臓が口から飛び出そうになった。
サナの口は反射的に動いた。

「……はい。違います」

瞬間、自分の心が死んだように感じた。こんなに大好きなのに。
自分の人生の全てだと言っても過言ではないのに。

もしも街でばったり出会えたら、大好きです、って伝えたい。
そう夢見てきたのに。

一郎は視線を逸らして言った。

「まあいいわ。お前地味だし音楽自体に興味なさそだし。でも間違っても前のマネージャーみたいに俺の盗撮とかすんなよ」

サナは微笑まなきやと思ったけど、顔が引きつって無理だった。

せめて仕事は完璧にしよう。

それだけが、うそをついてまで推しに近づいた、ずるい自分にできる精一杯の誠意だった。

その日の夜。

シャワーを浴び、バスタオル一枚のままベッドに倒れ込む。

体からふわりと蒸気が立ち上る。部屋の明かりを落とし、抱き枕に手を伸ばしながらスマホを操作する。

ヘッドホンを装着して、再生したのは一郎のライブ音源。

シャウト。ブレス。かき鳴らされるギター。張りつめた高音。

サナの指先がふとももを這った。

太ももはすべすべと熱く、すでに汗ばみ始めている。

（だめ……こんなこと……）

脳裏に、今日の一郎の姿がフラッシュバックする。

近すぎる距離、通り過ぎたときにふわりと香った柔軟剤の匂い。

男らしい喉仏、思いのほか細かった手首、ちよっと掠れた声……。

「実物の一郎さん、死ぬほどかつこよかった……」

指がショーツの縁にかかり、ずらしていく。いつの間にか、そこはじんわり濡れていた。中指が熱を帯びた裂け目を撫でると、ぬち、という粘りつく音が耳に届いた。息が震えた。

「一郎さん……っ」

名前を口に出してしまった。それだけで、体がびくんと跳ねる。

——お願い、バレないで。こんな自分、絶対に知られたくない。

愛液は溢れ出し、サナは抱き枕に顔を埋めながら腰をくねらせる。

（一郎さんに大好きって伝えたかった……）

ベッドがギシ、ときしみ、サナの細い腰が弓なりに反る。

（一郎さん、気持ちいいよ。もっと、もっと……）

サナは、自室のベッドに仰向けに寝転んだまま、まるい乳房を露わにしていた。部屋の照明は落とされ、枕元の間接照明が、白い肌をぼんやりと浮かび上がらせている。

「……っ、一郎、さん……」

小さく名前を呼びながら、恥ずかしさと快感に身をよじらせた。

妄想の中では、自分の上に大崎一郎が覆いかぶさっていた。

現実の彼は、無口で、淡々としていて、よそよそしいのに。

妄想の中で、彼の長くて細い指が自分の脚のあいだに深く沈んできていた。

「……ダメ、そんなとこ、触られたら……っ」

指でなぞられて、押し上げられて、じんわりと滲むほどの湿り気がそこに生まれる。

現実の右手も、それをなぞるように、割れ目をなぞる。柔らかい花びらのようなヒダが、しつとりと濡れて、指の腹にまとわりつく。

「んんっ……っ、一郎さん……」